

櫛の枝で造った大ウス

今坂柳二

つい先日までチーチー坊が鳴いてんと思ったら、早いもんだ、今朝はもうツクツク法師が鳴いておった。蟬ちゅうと、わしは思い出すことがある。わしらの産土神うぶぢいの境内に櫛の大木がありましてな、いや、そこらにある大櫛とは訳がちがうんじや。関東の三大櫛って、うちのじいさんが言っておった。あにしろ櫛の日陰がな、なんと五反歩もあるんだ。だもんでよ、夏の暑い日には町中の人が団扇片手に涼みにあつまるとさ。おらが婆ちゃんなんぞ、誰に聞いたもんやら、あたしの町の白山様の櫛は一里四方に枝が伸び広がってあって、サヤマ中の蟬が寄り集まるもんだから、大声ださにあ話ができんかったって、よくそんな話を聞かされたもんじやよ。



大櫛のあった白山神社(狭山市駅東口)

涼しい日陰に集まるのはいいもんじや。秋の紅葉も見事じゃし、限りなく降りつもる落ち葉もいい風情だ。でもね、人様の気持ちはさまざまでな。一里四方だか、五反歩だか、日陰に住む人たちから声が上がった。「おらがじゃあ春んなるまで陽が当たらん」「年寄りがコタツから離れられん言ってる」「風邪ひくと春までひきっぱなしだよ」「冬中シモバシラが溶けんで、麦が枯れそうだ」「伐ってくれ、なんて言うとバチが当たるけんど、んでもよろし…」

こんなとき、船の甲板材に買いたいちゅう業者がたずねてきた。んでな、明治十年、六十円で話がついたちゅうもんだ。

ああ、史実って、あんまり面白くねえなあ、んで、このところは飛ばして次へ進むことに致しましょう。昔ばなしの結末は、やはり怪異。そして愛すべき庶民の動向を少しばかり付け足して、一巻の終わりとしましようか。

さて、船の甲板材に伐り倒された白山神社の大櫛、甲板材は幹だけで、他の部分は境内に置き放し、誰でも欲しい者がおれば自由にしてよろしいとの話。何と言おうが、ご先祖の形見のような思いがこもった神木の枝々じゃ。よし、わしはこの枝で米搗ウスを造るぞ。枝って言ったって関東三大櫛として年輪を刻んだ天下の銘木じゃ、正月の餅、三月の草餅、五月の柏餅、土用の力餅。「ご神木で造ったウスなら家の繁栄疑いなしじゃ。わしもウスを造るぞ、枝を一本頂きますぞ」「おらはウスと一緒にキネにも使うぞ」「おらは将棋盤を造って家の宝にするから一枝欲しい」

ところがところが、翌年二月、近所に火災が発生し付近の住宅の大半が焼失。大櫛を伐った祟り、との風評が広がったのじゃが、それは明治初期のこと。平成の皆さんのお考えはどんなもんやら、是非ともお聞きしたいもんでありますな。うん、なに、祟りってどう思っかっていうことさ。

いまさかりゅうじ 狭山市菅井在住。二十四歳から俳句に関わって、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの探話・採話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下十冊発行。

編集後記

異常気象か台風9号では我が家の裏の掘割(窪川)も溢れ、橋の上迄。40年住んで初めてだったが、入間市や不老川でも水害が発生、狭山市でも避難所開設、安全な土地はどこにも無い事を実感しました。

「民謡のつどい」も終り、八幡神社の鹿子舞(唄で参加)、敬老会、文化祭と続き、芸術祭にも出演予定で、息の抜けない日が続きそう。

文団連総力を挙げての芸術祭については、紙面で詳しくお知らせしていきます。(高沢正夫)